

平成 14 年度

静岡県立高等学校教員実務研修

研究報告書

静岡県の子供の家庭学習等に関する調査」

静岡県総合教育センター
教職研修部実務研修員
西 川 徹

目 次

はじめに	p 1
調査方法	p 1
アンケート集計結果及び分析	
1 成績の自己評価	p 1
2 保護者のテストへの関心	p 2
3 通塾状況	p 3
4 家庭での勉強時間	p 3
5 自主的な学習態度	p 4
6 テレビ(ゲームを含む)の視聴時間	p 5
7 勉強以外で熱中していることの有無	p 6
8 将来就きたい職業について	p 6
9 一生懸命勉強することの効用	p 7
参考文献	p 8

はじめに

現在、教育改革が進展する中でゆとりの下でのきめ細かな教育や「新しい学力観」に基づく教育が行われている。本研究では、社会の変化に伴って、本県の子供たちにどのような変化が生じたかを主として家庭学習の観点から調査した。具体的には、小・中・高等学校の児童生徒に、学校外での学習状況、家庭での時間の使い方、将来の夢、勉強することの意義等に関するアンケート調査を実施し、ここ 10 年間で子供たちにどのような変化が生じたかを、過去の全国的なデータと比較し考察した。また、それ以外に将来の夢や勉強することの意義に関する調査を行い、考察も試みた。

なお、過去のデータとしては、国立教育政策研究所（以下国研と略す）の調査結果を使わせていただいた。また、今回のアンケート項目はそれの際のものと同様のものとし、結果を比較しやすくした。なお、比較資料としたのは、国研（当時国立教育研究所）の特別研究「児童・生徒の基礎学力の形成と指導方法との関連に関する総合的研究」（1991・1、1992・1、1993・1 調査 1992・1、1993・1、1994・1 刊行：対象児童生徒数小 6 5490 名、中 2 7091 名、高 1 2498 名）である。

調査方法

- 1 時期：平成 14 年 10 月
- 2 対象校
 - (1) 県内の公立小・中学校より無作為抽出した 23 校
 - (2) 県内の公立高等学校より無作為抽出した 11 校
- 3 対象者：小学校 6 年、中学校 2 年、高等学校 1 年の各校 1 クラス
- 4 回収数：小学校 6 年生 346 名、中学校 2 年生 364 名、高等学校 1 年生 432 名

アンケート集計結果及び分析（単純集計及び国研との比較）

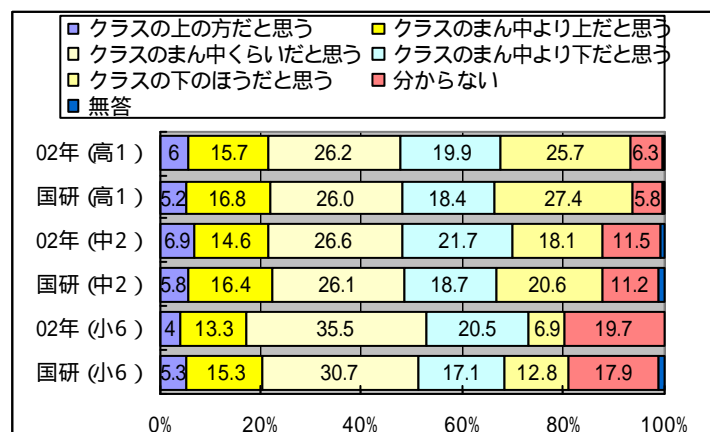
1 成績の自己評価

「成績がクラスの中でどれくらいだと思うか」という問いで成績の自己評価を尋ねた。

全体の傾向としては「上位」「まん中より上位」の回答率が「まん中より下」「下位」の回答率に比べてやや低かった。自分の成績を若干謙遜して評価している傾向にあることがうかがえる。

「分からない」と回答する比率は

成績の自己評価（図 1）



小6が最も高く、次いで中2、高1が最も低くなっている。

約10年前の国研の調査結果との比較では、小6で、「まん中くらい」と答えた生徒が多少増えているが、概ね成績の自己評価に変化は見られない。

2 保護者のテストへの関心

「家の人が学校で受けたテストの点数を聞くか」という問いで保護者のテストへの関心を尋ねた。

「いつも必ず聞く」の回答率は中2が50%強と高く、小6は20%弱と低い。

約10年前の国研との比較では、小6においては「聞くことはない」が10%以上増えている。高1では逆に「聞くことはない」が減り、「いつも必ず聞く」「時々聞く」の合計が増えており、親が子供の成績に関心を示す時期が変化していることが分かる。

また、成績の自己評価と保護者のテストへの関心度との関連を、学習集団毎に比べてみた。なお、成績の自己評価についてはアンケート項目では細かく区切り過ぎているので、以下のようにまとめて表現した。

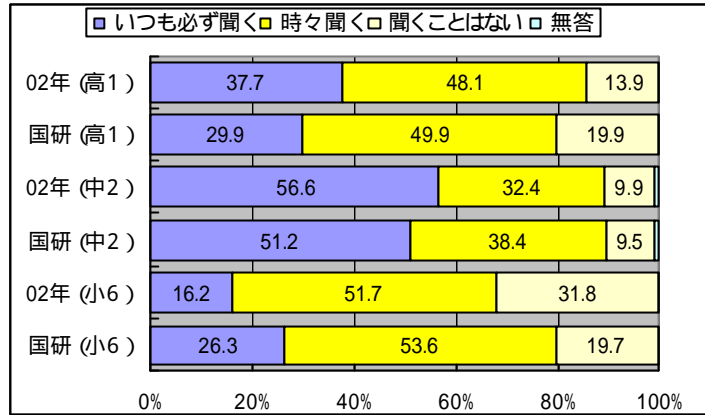
成績の自己評価

クラスの上の方だと思う、クラスのまん中より上だと思う **上の方**

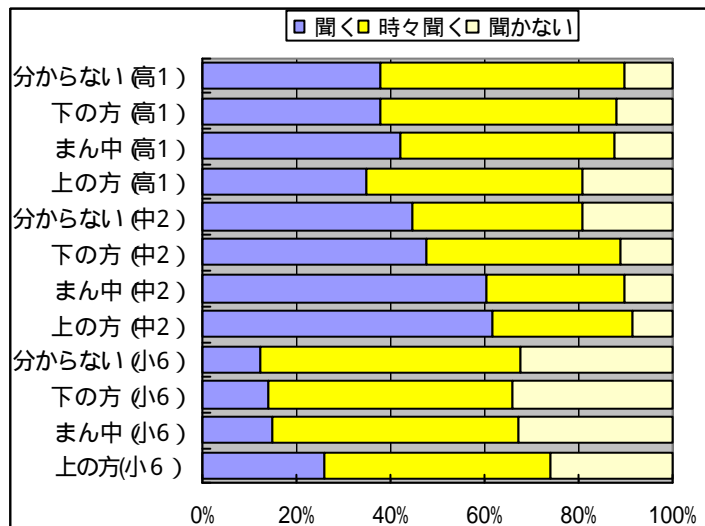
クラスのまん中より下だと思う、クラスの下の方だと思う **下の方**

小6、中2においては、保護者がテストの点数をいつも必ず聞くことと成績の自己評価の高さは関連性があるようだが、高1では関連性は見られない。

保護者のテストへの関心(図2)



成績の自己評価×保護者のテストへの関心度(図3)



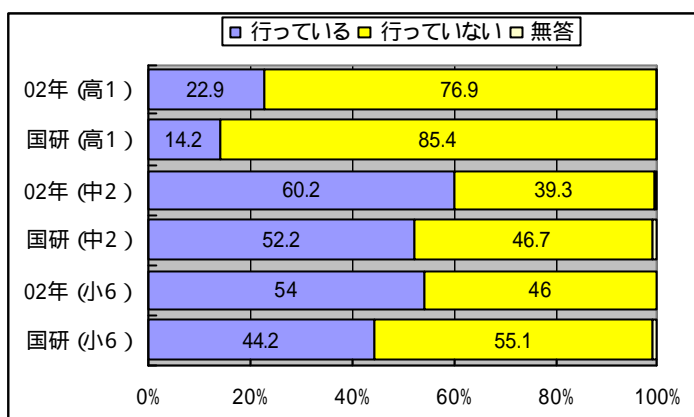
3 通塾状況

「学習塾（そろばん、習字、ピアノなどは除く）や学習教室などで勉強をしているか」という問いで通塾状況を尋ねた。

高1に比べ、中2、小6の通塾率が高かった。特に中2では60%強となっている。

約10年前の国研との比較では、どの学年とも塾に通う割合が増えている。

通塾状況（図4）



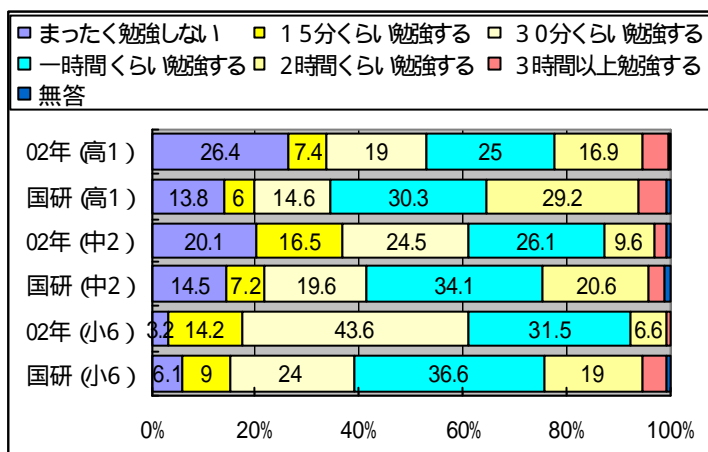
4 家庭での勉強時間

「1日どれくらいの時間、家で勉強をしているか（学習塾等は除く）」という問いで家庭での勉強時間を尋ねた。

「2時間くらい」「3時間以上」の合計比率は小6が最も低く、次いで中2、最も高いのが高1で、「まったく勉強しない」の比率も小6が最も低く、次いで中2、最も高いのが高1の順である。上にいくにつれ、家庭での勉強時間が二極化することがうかがえる。

約10年前の国研との比較では、どの学年においても、ここ10年で1時間以上勉強する割合が減少している。「まったく勉強しない」としたものが中2では5%、高1では10%以上増加している。勉強時間の平均（表1）を比較してみると15分程度、家庭での学習時間が減少している。

家庭での勉強時間（図5）



平均勉強時間の変化（表1）

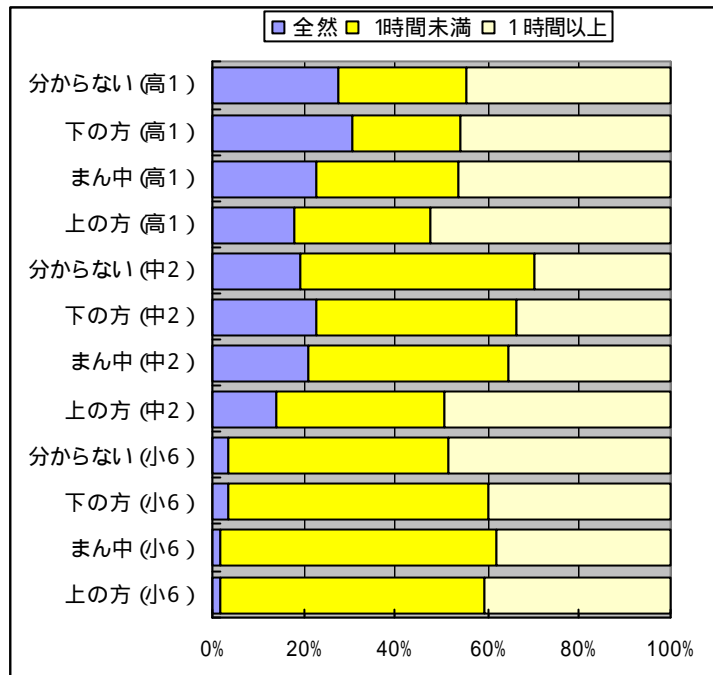
勉強時間	0時間	15分くらい	0.25時間
1時間くらい	1時間	2時間	2時間
3時間以上	3時間		
としたときの家庭での勉強時間の変化			
小6	1.03	0.73 (時間)	(0.3時間減)
中2	0.95	0.70 (時間)	(0.25時間減)
高1	1.14	0.85 (時間)	(0.29時間減)

また、家庭での勉強時間と成績の自己評価との関連を学習集団毎に比べてみた。なお、成績の自己評価については、2と同様まとめたものを用い、家庭での学習時間についても、アンケート項目では細かく区切り過ぎているので、以下のようにまとめて表現した。

家庭での勉強時間
 まったく勉強しない 勉強しない、
 15分くらい・30分くらい 1時間未満
 1時間くらい・2時間くらい・3時間以上 1時間以上

小6においては成績の自己評価と家庭での勉強時間に関連は見られない。中2、高1では家庭での学習時間が少ないと、成績の自己評価が低くなる傾向が見られる。

家庭での勉強時間×成績の自己評価（図6）



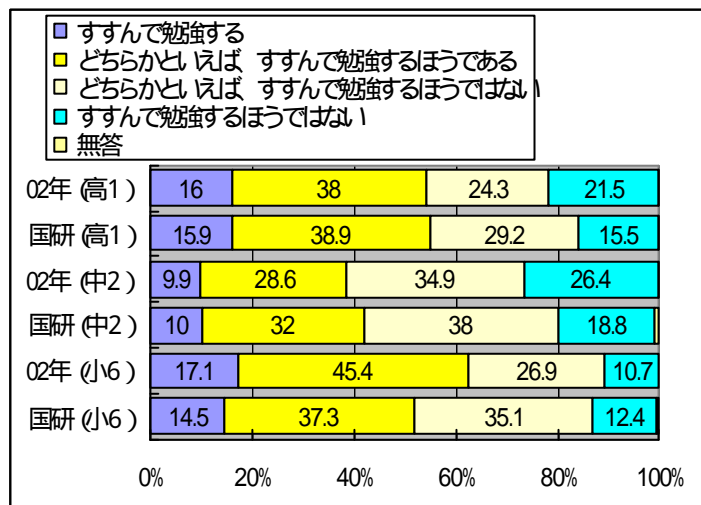
5 自主的な学習態度

「家の人に『勉強しなさい』と言われなくても、自分からすすんで勉強するほうか」という問いで自主的な学習態度を尋ねた。

「すすんで勉強する」「どちらかといえば、すすんで勉強するほうである」といえば、すすんで勉強する」の合計比率は、小6は60%強、中2が40%弱、高1は50%強だった。

約10年前の国研との比較では、中2、高1で「すすんで勉強する」とした割合は変化していないが「すすんで勉強するほうではない」とした割合は増加している。

自主的な学習態度（図7）



6 テレビ(ゲームを含む)の視聴時間

「ふだん家でどれくらいの時間、テレビを見たり、ゲームをしたりするか」という問いでテレビ(ゲームを含む)の視聴時間を尋ねた。

小6、中2共に4時間以上が20%で、2時間以上の合計比率も70%強である。高1は4時間以上が10%で、2時間以上の合計比率は60%弱である。

約10年前の国研との比較では、どの集団も視聴時間が1時間以内の割合は変わらない。3時間以上の割合は増加している。

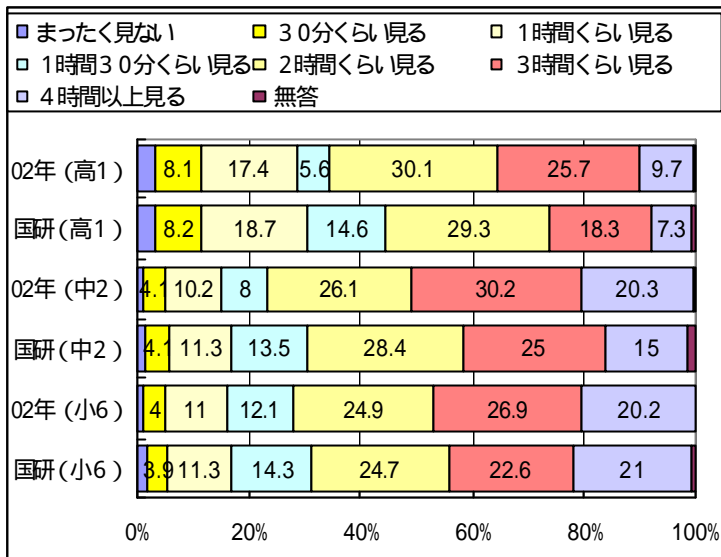
視聴時間の平均(表2)で比較してみても、どの集団でも視聴時間が増加していることが分かる。

また、家庭での勉強時間(学習塾等は除く)とテレビ(ゲーム)の視聴時間との関連を学習集団毎に比べてみた。家庭での勉強時間については4と同様まとめたものを用い、テレビの視聴時間についても、アンケート項目では細かく区切り過ぎているので、以下のよう¹にまとめて表現した。

テレビの視聴時間
 まったく見ない テレビを見ない、
 30分くらい・1時間くらい 1時間以内
 1時間30分くらい・2時間くらい
 2時間以内、
 3時間くらい・4時間以上 2時間超

小6ではテレビ(ゲーム)の視聴時間と家庭での勉強時間(学習塾等は除く)との関連は読み取れない。中2、高1といくにつれ、テレビの視聴時間が長くなるほど家庭での勉強時間は短くなっている。

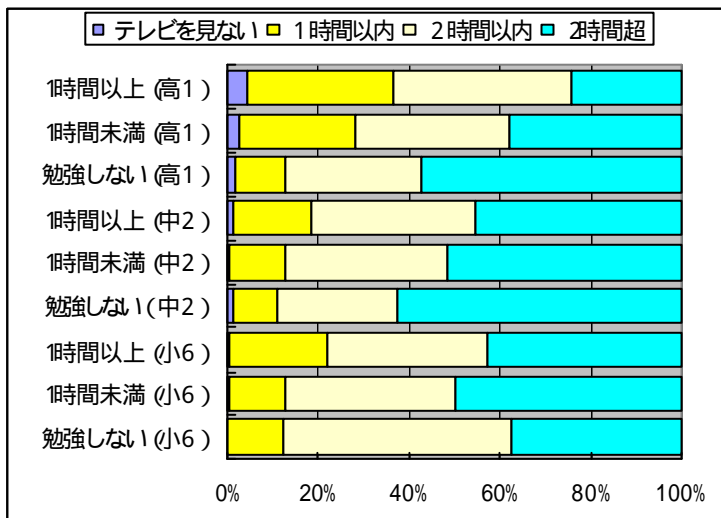
テレビ(ゲームを含む)の視聴時間(図8)



平均視聴時間の変化(表2)

グループ	平均視聴時間(時間)	変化(時間)
小6	2.36	2.42 (時間) (0.06時間増)
中2	2.25	2.48 (時間) (0.23時間増)
高1	1.87	2.06 (時間) (0.19時間増)

テレビの視聴時間×家庭での勉強時間(図9)



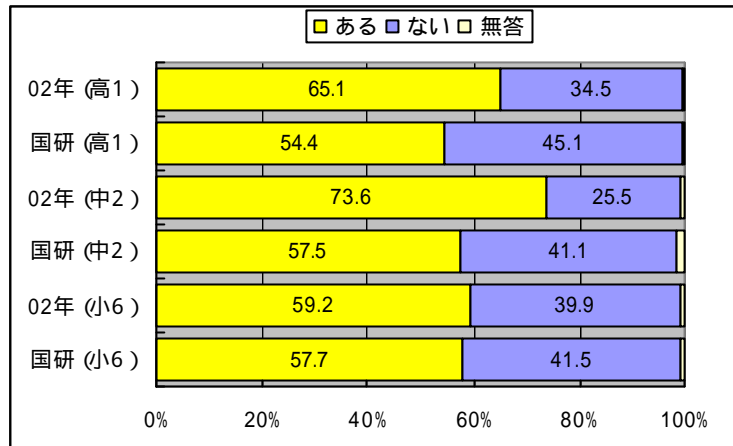
7 勉強以外で熱中していることの有無

「勉強することのほかに、何か、一生懸命熱中してやっていることがあるか（具体的に回答を記入する欄あり）」という問いで、勉強以外で熱中していることの有無を尋ねた。

「ある」と回答したのは、小6が60%弱、中2が70%強、高1が70%弱。「ある」の具体的な回答では、中2、高1で「部活動」に関連した回答が約60%を占めた。（中2 61.9%、高1 59.7%）。

約10年前の国研との比較では、「ある」とした割合は小6ではさほど変わらない。中2では15%、高1では10%増加している。

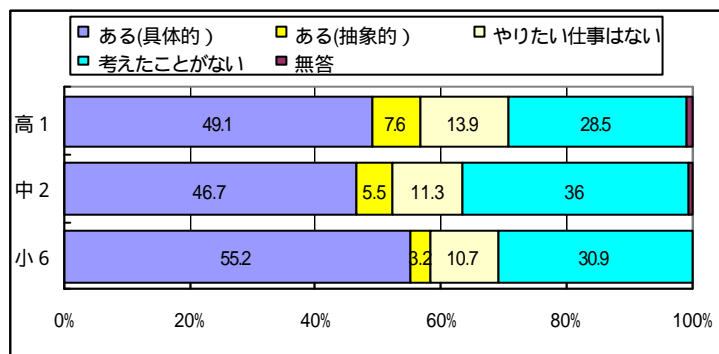
勉強以外で熱中していることの有無（図10）



8 将来就きたい職業について

おおよそ半数の子供が将来就きたい職業を具体的に書くことができなかった。また、上にいくにつれて抽象的な答え（表3）が増えている。また、「考えたことがない」と回答した比率は中2が一番高く（36%）、高1でも30%近くあった。

将来就きたい職業について（図11）



抽象的な答え一覧（表4）

小6：オーナーになる/お店/楽しく仕事ができる所/給料が高い仕事/自営業/人の役に立つ/定職/店員

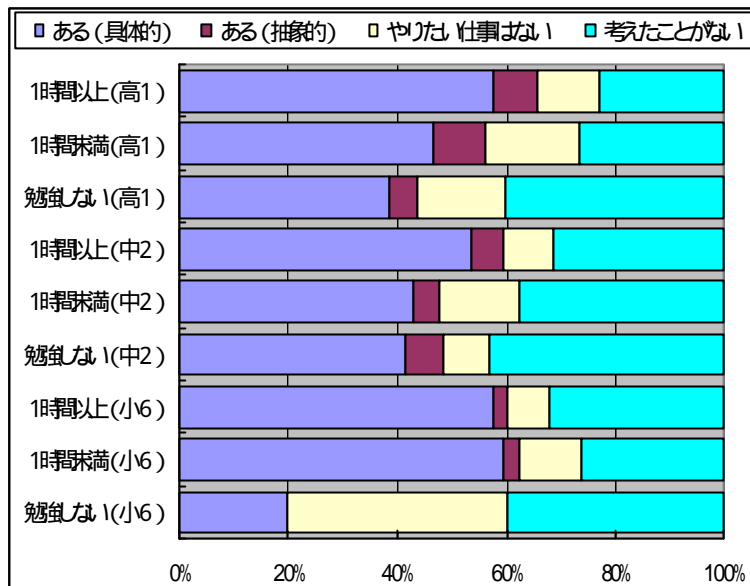
中2：いい仕事/お店の店員/楽しくて儲かる仕事/楽しくやりがいのある仕事/楽しければよい/金の沢山もらえる/言えない/個性が引き出せる仕事/高収入/自分がやりたい仕事/自分が若いと思える仕事/自分の興味がある好きな仕事/収入の多い仕事/収入の多く安定している仕事/将来の夢を実現している/人の役に立つ/平凡な仕事/夢と近い職業/具体欄未記入(2)

高1：いやです/おもしろいの/もうかる仕事/やりがいのある仕事/安定した収入を得られる仕事(5)/家の仕事と両立できるもの/皆に顔を知られるか尊敬される仕事/好きなこと(7)/考えている/資格を取ってできる仕事/自分がやりたい仕事(4)人の役に立つ(2)生き甲斐のある仕事/具体欄未記入(6)

また、将来就きたい職業の有無と家庭での勉強時間との関連を学習集団毎に比べてみた。なお家庭での勉強時間については4と同様まとめたものを用いた。

小6においては将来就きたい職業の有無と家庭での勉強時間との関連は見られない。中2、高1と上に行くにつれて、家庭での勉強時間が短いほど、将来就きたい仕事の有無で「考えたことがない」とする比率は高くなり、具体的に将来就きたい職業があるとする比率が低くなっている。

将来就きたい職業の有無×家庭での勉強時間（図12）



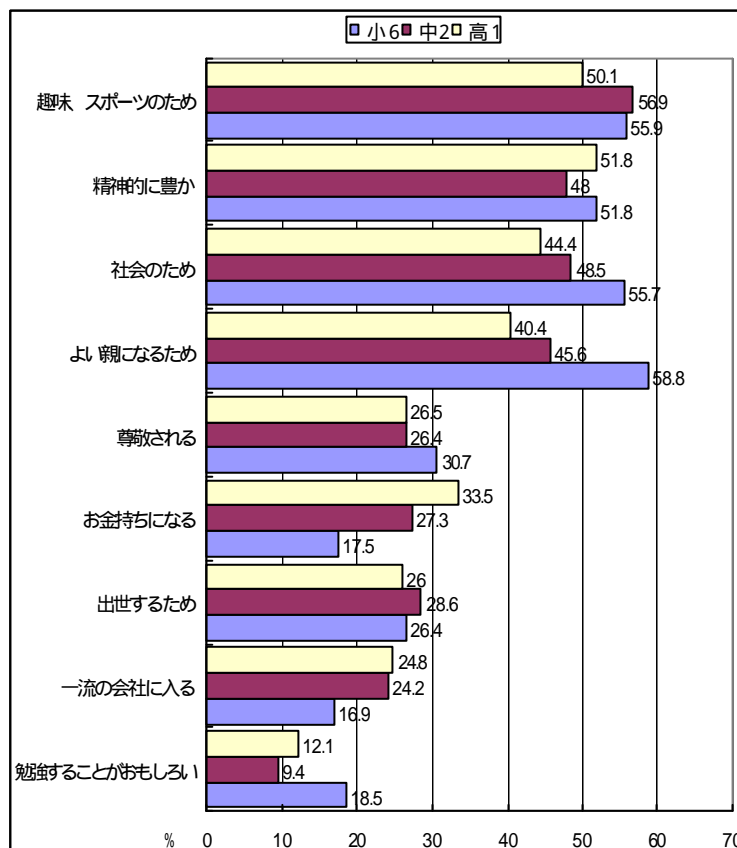
9 一生懸命勉強することの効用

集計は傾向をはっきり見るために「すごくそう思う」と「わりとそう思う」の合計比率を使った。

全体的に低い値である。高かったのが「趣味、スポーツのため」、「精神的に豊か」、「社会のため」、「よい親になるため」。逆に低かったのは「勉強することがおもしろい」が極端に低く、「一流の会社に入る」「出世するため」「お金持ちになる」「尊敬される」も低かった。

小6、中2、高1の順に高くなっているのは「一流の会社に入る」(16.9 24.2 24.8)、「お金持ちになる」(17.5 27.3 33.5)。逆に低くなっているのは「よい親になるため」(58.8 45.6 40.4)「社会のため」(55.7 48.5 44.4)であった。

一生懸命勉強することの効用（図13）



末筆になりましたが、調査に御協力くださった先生方、児童生徒の皆さん、また、資料を提供してくださった国立教育政策研究所に、心より感謝する次第です。

参考文献

研究紀要・資料名	発行所	
特別研究「児童・生徒の基礎学力の形成と指導方法との関連に関する総合的研究」第二 年次報告	国立教育研究所	1993
特別研究「児童・生徒の基礎学力の形成と指導方法との関連に関する総合的研究」第三 年次報告	国立教育研究所	1994
特別研究「児童・生徒の基礎学力の形成と指導方法との関連に関する総合的研究」調査 用紙および反応率一覧	国立教育研究所	1994
研究所報 Vol.111997.3 第2回学習基本調査報告書（中学校版）	ベネッセ教育研究所	1997